早稲田大学審査学位論文(博士)の要旨
2,54/(2)

博士（人間科学）学位論文概要書

# 自己発達と社会的相互作用論

## —「ＬＤ（学習障害）」教育にみる１つの問題提起—

1998年１月

早稲田大学大学院人間科学研究科

福留　晶子

指導教授　濱口　晴彦

W
学位論文
2541
2

本研究の目的は、「ＬＤ（学習障害）」教育を取り上げることで、現代社会において子どもの教育を考える際に、学校社会と家庭を含んだより大きな社会との関係のなかで、よりマクロな視点から子どもの自己発達をとらえていく社会的相互作用論を提示することである。

１章では、米国の社会心理学者ミード（Mead,G.H.）の自己論を中心に取り上げる。ミードは社会的行動主義の立場から、自己の問題を社会的状況にある具体的な行為からアプローチすることを提唱した。彼は人間に特有な心的現象が個人に還元できず、他者との関係の中で形成される社会的相互作用を前提にしたものであると考えた。ミードの自己発達論は、「プレイ」という役割取得の１つの形態に注目している。この「プレイ」の概念は、彼の教育観においても重要な位置を占める。彼の「プレイ」概念を教育の観点からとらえ直すことで、より多様な「プレイ」の局面を理解することができ、またそれはより正確な彼の自己発達論を考察することにつながると考える。自己が本質的に社会的な性格をもつというミードの主張は、発達と教育の問題が切り離して考えられず、他者との関係において初めて成立するという基本的な視点を与えており、教師らとの関係における子どもの自発性を尊重した彼の教育観から、現代の学校教育において生じてきた問題への提言を取り出すことができると考える。なぜなら、現代の学校教育の課題は、基礎的・基本的な学力の形成とともに、子どもの主体性、自主性を育てるといった自己発達を導くことに力点が置く方向に変化が見られるからである。

２章では、現在の学校教育の場で議論を呼んでいる「ＬＤ（学習障害）」の問題を取り上げる。「ＬＤ」とは、さまざまな立場から定義がなされているが、現在までのところ統一した見解は出されておらず、ここでは、「通常学級に在籍しているが、知能程度に見合った読み、

書き、算数といった学力または聞く、話すといった言語能力を持たないために、他者とのコミュニケーションがうまくとれず、通常の学級形態においては、その能力を十分に発揮できない子ども」とする。その原因は、中枢神経系の機能障害と推定されているが、主に集団行動の中で問題児とされてしまう発達に偏りをもった子どもである。現在の日本の学校教育においてこのような子どもは、通常学級に在籍しながら特殊学級に通うという通級制度で主に対応している。教育制度の上で米国では、子どもにとって重要な他者である母親や教師を支えるシステムが整っているが、単に米国の教育体制をそのまま取り入れるのではなく、日本と米国の他者のあり方の違いを考慮して、日本の学校教育を整えていかなければならない。

3章では、「ＬＤ」教育を手がかりに自己発達について考えるための社会的相互作用論を提示する。「ＬＤ」は、その原因が生物学的なものと推定されても、現実的に問題が生じるのは社会においてであり、「ＬＤ」の問題行動が生まれるミクロな社会に注目し、ここでは「ＬＤ」の問題は、個人というよりも子どもとその子どもを囲む他者との関係の問題であることを強調する。「ＬＤ」と呼ばれた子ども（Ａ）の参与観察およびＡの家族と教師の視点からＡの問題行動を取り上げることで、「ＬＤ」教育とは家庭と学校の十分な連携の上で子どもにとって重要な他者が子どもに適切な反応を与えることであると主張する。子どもを取り囲む社会は、学校や家庭といった閉じた社会ではなく、自己発達を導くという共通の目的のもとに、子どもにとってのより大きな社会を構成することが「ＬＤ」教育にとって必要なのである。

その際、社会について考えるためにミードを祖として成立したシンボリック相互作用論を取り上げる。この立場では、自己発達を他者の指示を解釈し、お互いの相手の行為の意味を理解しようとする場合に

生じる相互作用過程、すなわち他者との役割取得の過程から説明する。社会とは力や要因の集合というよりも、人と人が何かを一緒にやっている場、何よりも人々の行為から成り立っており、意味の共有で成立しあう場である。ミードの社会的相互作用論のキーワードである「一般化された他者」は、既成の枠組みではなく、その時々に応じて常に作りかえられる「過程としての社会」と他者との関わりのなかで生まれる社会的行為によって作りだされる「達成としての社会」と考えられる。

本研究では、こうした知見を用いて、発達、教育といった現象は個人に還元せず、社会の視点からとらえることが不可欠であり、また現代社会において学校を取り囲む他の社会との関係を整え、学校、家庭、地域の互いの連携の中で子どもの自己を育てていく必要があることを主張している。